『詞源』鈔本紹介

松尾肇子

宋末元初の人、張炎の『詞源』は、最も早く体系的な詞論を著述したものとして知られる。筆者は、かつて拙著において、詞というジャンルの衰退・復興・発展にともなってこの著作が校訂を加えられながら幾版も出版された状況を述べたことがある。[1] またそれに先だって、詞源研究会で『宋代の詞論』[2]を出版した際には、巻末資料として「『詞源』諸本異同表」を作成した。その後、拙論執筆時に未見であった南京図書館所蔵『詞源』清鈔本を閲覧する機会を得たので、北京の国家図書館所蔵『詞源』明鈔本、および清・乾隆三年（一七三八）の奥書を持つ静嘉堂所蔵清鈔本とあわせて書写年代の早いものから紹介し、拙論に若干の補足を加えたい。

○国家図書館所蔵明鈔本『詞源』上下二巻　一冊

図書番号08628（以下、明鈔本と略称する）

藍色表紙に外題は記されていない。合紙を入れて改装されており30・3cm×18・3cm。原鈔用紙は縦24・6cm。字高は約18・5cm×14・5cm。無界。本文は半葉十行、毎行二十字、注は小字双行。「目録」1葉、「巻上」15葉、「巻下」18葉、「跋」2葉、すべて36葉。巻下の内題はもと「詞源巻上」とあり、朱で「下」と訂正している。このほか僅かながら破れや汚れの箇所に墨書が施されている。

前遊紙は5葉、その第一葉には旧蔵者である周暹（シュウセン）の以下の識語（／は改行を示す。また本稿における引用の断句は筆者による）が記されている。

戊午二月得此書於上海、以紙質筆急審之、／當是明時抄白、巻末有時至順改元季夏六／月謄於起善齋菊節三日装、欵此蓋從元人寫／本録出者、暇當取秦刻本一校之、叔弢識

戊午二月此の書を上海に得。紙質筆の急なるを以て之を審するに、當に是れ明時の抄白なるべし。巻末に「時に至順改元季夏六月起善齋に謄し、菊節三日装す」と有り。欵、此れ蓋し元人の寫本從り録出せし者ならん。暇に當に秦刻本を取りて之と一校すべし。叔弢識す。

ここに言うとおり、巻下末尾の「詞源巻終」の前に「時至順改元季夏六月謄於起善／齋菊節三日装」の二行がある。

印章は五種。「巻上」首葉上頭に「曽在周／叔弢處」の朱文方印および「四明盧／抱經樓／蔵書印」の白文方印、同じく下辺に「北京／図書／館蔵」「秦氏／子雙／圖籍」の朱文方印がある。また巻末にも「北京／図書／館蔵」がある。「曽在周／叔弢處」は識語を書いた周暹の、また「四明盧／抱經樓／蔵書印」は盧址の蔵書印である。第二葉上頭には二文字の朱文方印があるが不詳。

識語に見える「戊午」は民国七年（一九一八）。周暹、字は叔弢（シュクトウ）。「曽在周／叔弢處」の蔵書印は彼のものである。光緒十七年（一八九一）江蘇省揚州に生まれ、民国三年（一九一四）天津に移り、青島で事業を興すなどし、中華人民共和国成立後は天津市副市長を始め常務委員会委員などを歴任し、一九八四年天津で死去した。蔵書家としても著名であったが、一九五二年に北京図書館に寄贈した。その折の蔵書の一本である。[3]

周暹以前の旧蔵者である盧址（一七二五－九四）もまた蔵書家として知られた。字は丹陛、青厓。「四明盧／抱經樓／蔵書印」とあるごとく、四明すなわち寧波に「抱経楼」を建て、杭州の盧文弨（ロブンショウ）（一七一七－九六）の「抱経堂」とともに東西抱経と称された。咸豊十一年（一八六一）抱経楼は土匪に襲われて蔵書を奪われたが、売り出されたものは同郷の楊氏が買いとって返還した。しかし、民国五年（一九一六）には上海の書店「古書流通処」が買取り、各蔵書家に散収された。[4] 周暹の識語は、この時購入したことを示すのであろう。

秦子双が最初の収蔵者と思われるが、その人物については不詳。

手鈔の文字の線は細く固く、一筆である。「声」「聲」、「万」「萬」のように繁簡両体を混ぜるものもあるが、多くは「楽（樂）」「李（學）」「帰（歸）」「寿（壽）」「尽（盡）」「数（數）」「変（變）」「离（離）」など略字が甚だ多い。また、踊り字が用いられる。

巻頭の「詞源目録」は「巻上」と「巻下」とに分けられ、それぞれに各条目名が一字空格にして続けて記されている。内題の「詞源巻上」には「西秦玉田張炎叔夏編」とある。「詞源巻下」は墨で「上」と記したものの上に朱で「下」と重ね書きしている。

○静嘉堂文庫所蔵清鈔本『詞源』上下巻　一冊

２５６０－１８７（以下、静嘉堂本と略称する）

藍色表紙に外題は記されていない。縦30・8cm×横21・5cm、四針眼。無界。毎半葉十行、毎行二十字、注小字双行。白綿紙を用いる。葉数および配置は明鈔本に同じ。また明鈔本と同じく巻下末尾の「詞源巻終」の前に「時至順改元季夏六月謄於起善／齋菊節三日装」の元奥書があるほか、跋文の後に、

時乾隆戊午孟秋七月照元人鈔／本録於朗嘯齋

時に乾隆戊午孟秋七月、元人の鈔本に照らして朗嘯齋に録すの奥書がある。

蔵書印は目録首葉に五種「朗嘯齋圖書記」「静嘉堂珍蔵」「永同心賞」「雝（ヨウ）手書豈薄福所能」「歸寧陸樹聲蔵書之記」、巻上首葉に静嘉堂蔵印のほか三種「得蔵於密」「田耕堂蔵」「武陵仲子」、末葉の奥書の後に「田耕堂蔵」「平江黄氏圖書」の二種がある。

「歸寧陸樹聲蔵書之記」にある陸樹声は、字を叔桐といい、清末四大蔵書家の一人に数えられた陸心源（一八三四－九四）の第三子である。陸心源の死後、その蔵書は静嘉堂文庫に売却された。この本は陸

心源「十萬卷楼」旧蔵書の一本である。[5] 彼の『皕宋楼蔵書志』巻一二〇「詞曲類二」に『詞源』が著録されている。

詞源二巻　影元抄本　黄蕘圃舊蔵

宋・西秦玉田張炎叔夏編

この後には、銭良祐および陸文圭の跋、それに清・阮元の『揅經室外集』の『詞源』の項目を並べている。[6]

この解題に言う「黄蕘圃」は、清中葉の黄丕烈（一七六三―一八二五）であり、「平江黄氏圖書」の蔵書印は彼のものである。[7] 黄丕烈は江蘇省呉県の人で、乾隆五十三年（一七八八）挙人となった。乾隆・嘉慶年間で最も著名な蔵書家であり、宋刻本百部の所蔵を誇っただけでなく、宋元明の旧鈔本も収集した。

「田耕堂蔵」は清の張紹仁（生卒年不詳）の蔵書印。字は学安、号を訒庵（ジンアン）・巽翁という。黄丕烈とも交遊のあった嘉慶・道光年間の蔵書家である。江蘇省長洲の人で、蘇州に住み、蔵書楼を「緑筠戸」「執経堂」等と言った。静嘉堂所蔵書では他に『資治通鑑釈文』『後村居士集』などにも「田耕子蔵」の印記がある。[8]

以上のように蔵書印から静嘉堂本は著名な蔵書家の間を流伝した書物であることが分かる。

手鈔の文字は、明鈔本に比べて丁寧ではあるが、「属（屬）」「数（數）」「商（商）」などの略字、また踊り字が用いられている。しかし、字数行数だけでなく改行の箇所なども明鈔本と異同がなく、奥書に言う乾隆戊午三年（一七三八）の手鈔は、明鈔本には遅れるものの、元人の鈔本から直接に書写したものとしてよい。

○南京図書館所蔵清鈔本『詞源』上下二巻　一冊

図書番号ＧＪ１１１９９２（以下、南図本と略称する）

原表紙は香色。合紙を入れて改装され、藍色の表紙が加えられている。前後各１葉は改装時の後補。原装後装いずれの表紙にも外題は記されていない。縦27・4㎝×横17・9㎝、四針眼。字高は縦16・5㎝×11・0㎝、無界。版心部分の下部表側には「目録（巻上・巻下）」、裏側には「幾（葉）」が記されている。毎半葉七行、毎行二十字、注は小字双行。

第一葉には「揅經室外集[9]／詞源二巻提要」を半葉四行毎行二十字で書写。第二葉から第四葉までの３葉は「詞源目録」であり、半葉七行。上下巻とも、「作詞五要」の各条目に到るまですべて改行して一行ずつ記されている。本文「巻上」は21葉、「巻上」は25葉、さらに「銭良佑跋」「陸文圭跋」各１葉。末尾には遊紙１葉があり、すべて51葉である。先の二本に比べて葉数が多いのは、巻上の各図にそれぞれ半葉を当てているからである。すなわち「陽律陰呂合聲圖」、「律呂隔八相生圖」冒頭の解説三行、またその第二図、「五音宮調配属圖」に各半葉を当てている。また「五音宮調配属圖」の部分は「黄鍾宮」「大呂宮」など各宮ごとに葉を替えている。これに対して巻下では、明鈔本および静嘉堂本の改行箇所や空格を詰めている。すなわち巻下はじめの「序」に当たる部分の「先人」以下の後半は改行せず続けており、「清空」門に引用される「唐多令」詞や「意趣」門の「水調歌」以下五首の詞作品は「（詞牌）云」に続けて詰めたうえで引用作品部分の字下げもしない。「詠物」門以下で元鈔本系統が引用作品の前後を二字分空格にしているのに対しても、或いはまた各引用詞の最

後の一字の下に空格があるのに対しても、南図本はすべて詰めている。但し、前後段の間に一字分空けるのに対しては、「〇」を置いている。

なお、「雑論」については13条に分かれており、明鈔本・静嘉堂本が11条であるのに比べると2条多い。それは、「大詞之料」および「詞欲雅而正」で改行していることによる。そのほか、意味の通りが良いように全体に校訂を施されたもののようである。後述する。

また、元鈔本系統が巻下末尾に載せる「時至順改元季夏六月謄於起善齋菊節三日装」の元奥書、および「詞源巻終」は、南図本には無い。

蔵書印は五種。原表紙右下に「八千巻樓／珍蔵善本」の朱文方印。提要および目録の首葉には、「南京圖／書館善／本圖書」（以下、南図蔵書印と称する）および「江蘇第一／圖書館／善本書／之印記」（以下、江蘇蔵書印と称する）の二種の朱文方印がある。「巻上」首葉右下にもこの二種の図書館蔵書印があるほか、「詞源巻上」の内題の上頭に「錢唐丁／氏正修／堂蔵書」の朱文方印がある。なお「巻上」の「律呂隔八相生圖」の二面の図の下部にも南図蔵書印が押されている。「陸文圭跋」の末尾下部には南図蔵書印・江蘇蔵書印と、この二印にはさまれて中華民国時代、江蘇省国学図書館小史であった梁茨（クン）の印章「沓約（ケイ）／過眼」の白文方印がある。[10]

「八千巻樓／珍蔵善本」「錢唐丁／氏正修／堂蔵書」の二印は清朝の蔵書家、丁丙（一八三二－九九）の蔵書印である。丁丙は清末四大蔵書家の一人で、兄の丁申とともに杭州に「八千巻楼」という蔵書楼を営んだ。「正修堂」は居所の名である。彼らの死後、蔵書流出の危機にいたった際、繆荃孫の斡旋によって光緒三十三年（一九〇七）両江総督端芳にその多くが買い上げられ、宣統元年（一九〇九）開館の江南図書館に収蔵された。[11] さらに民国元年（一九一二）江南図書局と改名ののち、断続して収書が為されるとともに、鉢山図書館、江蘇第一図書館となり、一九二九年には江蘇省国学図書館と改名し、一九五二年に至って南京図書館に合併された。該書の図書館印は『詞源』鈔本も八千巻楼旧蔵書の一冊として伝わったことを示している。

巻頭の阮元（一七六四－一八四九）による提要「揅經室外集／詞源二巻提要」も含めて全体は一筆の丁寧な楷書で書写されており、阮元によって提要が執筆されて以後、丁丙までに手鈔されたと言える。

丁丙の『善本書室蔵書志』巻四十にはこの本についての著録がある。解題は注(6)に引いた阮元の『揅經室外集』を襲い、次のように記している。

詞源二巻　精寫本

西秦玉田張炎叔夏編

炎有山中白雲詞。　四庫已著録、是編見於讀書敏求記、自明陳繼儒改竄炎書并襲沈義父樂府指迷之名、刊入續祕笈中、遂失其真、儀徵阮元撫浙時得元人舊本影寫進御、上卷詳論五音十二律律呂相生以及宮調管色、諸事釐析精允、間系以圖、與姜白石歌詞九歌琴曲所記用事紀聲之法大略相同。下卷歷論制曲句法字面虛字清空意趣用事詠物節序賦情離情令曲雜論五要十四篇、並足以攷見宋代樂府之制。前有陸文圭序、此本依元槧影寫者也。

はじめの「是の編は読書敏求記に見ゆ」および末尾の「前に陸文圭の序有り、此の本は元槧に依りて影寫せし者なり」の文字は『揅經室外

集』にはない。しかし陸文圭の序が前にあると記されているのは、南図本の現在の状態と一致しない。すなわち「陸文圭序」は無く、巻末の「錢良佑跋」一葉のさらに後に「陸文圭跋」一葉がある。「陸文圭序」は改装が施されるまで、もしくはその際に失われたか、「序」ではなく「陸文圭跋」が前にあったのを巻末へ移して体裁を整えたものであろうか。明らかにしえない。また、この本が「元槧」すなわち元刊本によって影鈔されたものであるとする結語についても疑問がある。現在のところ『詞源』の元刊本は伝存を聞かず、また書目類への著録もない。「陸文圭跋」には刊行の次第は書かれておらず、もし「陸文圭序」があったとすればそれに刊行の辞があったのであろうか。

ところで、ここに紹介した三種の鈔本の他に、阮元が入手した元人旧鈔本を嘉慶年間に影鈔した『詞源』が、『宛委別蔵』に収録されている（以下、宛委本と略称する）。以下にこれら諸本を対照し、四本の関係と各本の独自性を探ってみたい。

まず、全体の渡る書面は、先に述べたとおり明鈔本および静嘉堂本とは酷似しており、同一祖本からの手鈔とみてよい。また文字についても、異体の関係にあるものを除けば、明らかに誤字と思われるものまで含めてその異同はごく僅かで、以下の五例にとどまる。前掲『宋代の詞論』との比較の便のために、秦恩復『詞学叢書』所収本（秦本と略称する）の葉行を標目とする。但し、秦本との異同を記すものではない。葉行に＊を付した箇所は詞を引用した部分である。

門名	秦本葉行	明鈔本	静嘉堂本
［意趣］	06b, 10 ＊	別時圓	別時員
	06b, 11 ＊	圓	員
［詠物］	09a, 11 ＊	更若	更苦
	09b, 06 ＊	柳傳	柳傳[12]
［雑論］	14b, 06	姜曰石	姜白石

これに対して宛委別蔵所収本と南京図書館所蔵清鈔本とは明鈔本をそのままに写したものではない。また、宛委本と南図本が同一系統ともすぐには言えないようだ。すなわち南図本がそれぞれ半葉を当てる各図を宛委本は詰めており、また「五音宮調配属圖」の各宮ごとの改葉もしない。ただ、巻下「清空」門に引用される詞作品が「（詞牌）云」に続けてすべて詰めている点では、宛委本と同じである。但し、前後段の間に一字分空けるのに対しては、「〇」を置いている。しかし、こうした点については、手鈔の際に体裁を改めたのかもしれない。そこで、煩瑣に渡るが、以下に三種の鈔本の相違箇所をそれぞれの特徴にしたがって挙げる。[13] 異体・通用の異文は原則として省略した。葉行に＊を付した箇所は詞を引用した部分である。

まず、発音ないし略字を含む字形の類似による通用の関係にあるもの。

門名	秦本葉行	明鈔本	静嘉堂本	宛委本	南図本
【巻上】					
［目録］	01a, 09	結色正訛	結色正訛	結色正訛	結聲正訛

[五音相生]			
01a, 05	施生	施生	施聲
[律呂隔八相生圖]			
03b, 03	大旅	大旅	大呂
[律呂隔八相生]			
05a, 09	玄孫	玄孫	元孫(14)
[十二律呂]			
06b, 10	祇	祇	祇
08a, 04	京蟄	京蟄	驚蟄
08a, 11	中筦中呂宮	中筦中呂宮	中管中呂宮
08b, 05	谷雨	谷雨	穀雨
[謳曲旨要]			
13b, 05	才断	才断	纔斷
【巻下】			
[序] 01b, 09	類別于后	類別于后	類列于后
[拍眼] 04a, 03	旧弐	旧弐	舊式
04a, 11	是詵	是詵	是說
[製曲] 04b, 08	貼之壁	貼之壁	貼之壁
[句法] 05a, 04	存法揮	存法揮	好發揮
[字面] 05b, 05	妥溜	妥溜	妥溜
05b, 06	温廷筠	温廷筠	温庭筠
[清空] 06a, 09	糖多令	糖多令	糖多令
[意趣] 07a, 08 ＊	帳門	帳門	悵門
07b, 02 ＊	政宗、	政宗、	政宋
07b, 09 ＊	不莞	不莞	不莞
[用事] 08a, 05 ＊	故沙	故沙	胡沙
[詠物] 08b, 04 ＊	厚盟	厚盟	厚盟
08b, 04 ＊	上花	上花	上苑
09a, 01	詠燕去	詠燕去	詠燕云
09a, 05	白日	白日	白石
09a, 10 ＊	雖宮	雖宮	離宮
09b, 10 ＊	再	再	載
10a, 01 ＊	繡袒	繡袒	繡袒
10a, 03 ＊	籠云	籠云	籠雲
[節序] 10a, 10 ＊	淡雅	淡雅	澹雅
10b, 01 ＊	如畫	如畫	如畫
10b, 01 ＊	游治	游治	游治
10b, 07 ＊	酤酒	酤酒	沽酒
[賦情] 11b, 07 ＊	人筦	人筦	人管
11a, 11 ＊	胎霞	胎霞	臉霞
11b, 03 ＊	朱愰	朱愰	朱愰
11b, 03 ＊	夢便	夢便	夢更
[離情] 12b, 04	此佐	此佐	此作
[令曲] 13a, 02	専門之孝	専門之孝	専門之學
13a, 02	射雕手	射雕手	射雕手
[雑論] 13a, 09	極玄	極玄	極元
13a, 11	干〃然	干〃然	于于然
13b, 03	少寛	少寛	少寛
			稍寛

13b, 04	間鍵	間鍵	關鍵
13b, 06	庚咏	庚咏	賡咏
14b, 02	最若	最若	最苦
14b, 09	姜成	姜成	姜成
14b, 09	看佗	看佗	看佗
15a, 04	咽嚼	咽嚼	咀嚼
15b, 03	雁丘	雁丘	雁邱
15b, 08	不韻剔	不韻剔	不韻則
16a, 03	旡三	旡三	旡一二
16a, 04	無庇	無庇	無庇
16a, 04	洋製轉折	洋製轉折	律製轉折
16a, 05	偏倒	偏倒	偏側
16a, 05	它宮	它宮	它宮
16a, 06	商謂	商謂	商調
16a, 11	秖能凍	秖能凍	秖能錬
［跋］ 01a, 02	鴈慺	鴈慺	鴈悽
01b, 06	云〃	云〃	六六
01b, 08	居生	居生	君生

以上、煩瑣に渡ったが、明鈔本と静嘉堂本との元鈔本系に対して、宛委本と南図本とに同文が多く、おおざっぱには二系統に分かれることが見て取れる。さらに南図本には異文が多くて意味が通りやすくなっており、手鈔の際に訂正したのでなければ、手鈔した原本にすでに訂正が施されていたのではないかと思われる。

以下には、明らかに校訂を経たと思われる異文を有する箇所をあげる。

門名	秦本葉行	明鈔本	静嘉堂本	宛委本	南図本
【巻上】					
［律呂隔八相生圖］					
02b, 11	出滞	出滞	出滞	出滞	出治
03a, 03	萬万	萬万	萬万	萬万	萬物
03a, 07	陽始	陽始	陽始	陽始	陽陽始
［律呂隔八相生］					
05a, 01	欠	欠	欠	欠	ム〈
［古今譜字］					
06a, 08	王工	王工	王工	王工	玉工
［五音宮調配属圖］ 06b 卯二月夾鍾の調					
	中呂宮	中呂宮	中呂宮	中呂宮	中管宮
	中呂調	中呂調	中呂調	中呂調	中管調
［十二律呂］					
07a, 09	太	太	太	太（行頭のこの一字を脱す）	
10b, 01	陰呂	陰呂	除呂	除呂	陰呂
［律呂四犯］					
12b, 03	啻犯宮	啻犯宮	啻犯宮	啻犯宮	商犯宮
13a, 02	黄鍾宮云	黄鍾宮云	黄鍾宮云	黄鍾宮云	黄鍾宮
13a, 04	字即是仙宮	字即是仙宮	字即是仙宮	字即是仙宮	即是仙呂
13a, 11行頭	一	一	（この一字を脱す）	（この一字を脱す）	

［謳曲旨要］			
14a, 07	含搵	含搵	含韵
【巻下】			
［音譜］ 02b, 03	有慢曲	有慢曲	有慢曲　（）の三字を脱す）
02b, 11	声字	声字	聲韻
03a, 01	協音	協音	協音
［拍眼］ 04a, 09	領袖	領袖	領袖
［製曲］ 04b, 03	而曲後述最是	而曲後述最是	而後述曲最是
04b, 05 ＊	西窓	西窓	西窓
04b, 06	詩思	詩思	恐
［句法］ 05a, 07 ＊	鳳閣	鳳閣	鳳閣
05a, 11 ＊	小数	小数	小樓
［清空］ 06a, 06 ＊	埜雲孤飛	埜雲孤飛	埜雲孤飛
06a, 08 ＊	娜婀	娜婀	婀娜
［意趣］ 06b, 08 ＊	歸去	歸去	歸去
07a, 07 ＊	残陽	殘陽	殘陽
07b, 06 ＊	佩環	佩環	佩環
［用事］ 08a, 02	詞	詞	詞中
［詠物］ 08b, 01 ＊	冰闌	冰闌	翦蘭
08b, 03 ＊	悞了	悞了	悞了
09a, 10 ＊	咏椹	咏椹	咏碪
09b, 04 ＊	時復剪	時復剪	時時欲剪
09b, 04 ＊	試摘	試摘	試摘
09b, 05 ＊	縷棗	縷棗	鏤棗
09b, 05 ＊	時将	時将	時將
09b, 07 ＊	沉吟處	沉吟處	沉吟静處
09b, 10 ＊	窄様	窄様	窄様
10a, 01 ＊	懊恨	懊恨	懊恨
［節序］ 10a, 08	起豈	起豈	豈
10a, 09 ＊	焐蠟	焐蠟	焐蠟
10b, 04 ＊	草脚	草脚	草脚
10b, 04 ＊	窓憶	窓憶	空憶
10b, 07 ＊	芳探花緒	芳探花緒	探花芳緒
11a, 03 ＊	万一悞	万一悞	萬一悞
11a, 03 ＊	簾隙	簾隙	窓際簾隙
11a, 06 ＊	人咲語	人咲語	人笑語
［賦情］ 11a, 09	簸弄月風	簸弄月風	簸弄月風
11a, 11 ＊	還是	還是	還自
11b, 02 ＊	帯困	帯困	帯圍
11b, 03 ＊	路遠	路遠	路迴
11b, 03 ＊	夢便	夢便	夢更
11b, 06 ＊	烟柳闇	烟柳闇	烟柳暗
［令曲］ 12b, 09	若陳簡斉	若陳簡齊	如陳簡齋
［雑論］ 13a, 07	音律所	音律所	音律所所
13b, 01	容	容	容
13b, 03	寛易	寛易	太易
13b, 07	次章質夫	次章質夫	和章質夫
14a, 05	不精一	不精一	不精一

14a, 06	好字者	好字者	好事者	好字者
14a, 07	諛	諛	諛佞	諛
14a, 10	本製	本製	製本	本製
14a, 11	一之所為情	一之所為情	之一為物	一之所為情
14b, 01	音	音	音矣	音
14b, 01	必不論雖美論成	必不論雖美論成	不必論雖美成	必不論雖美論成
14b, 05	詞賦梅	詞賦梅	賦梅	賦梅
15a, 01	坡詞	坡詞	東坡詞	坡詞
16a, 04	能融化	能融化	能融化	融化
01b, 01	舊事時	舊事時	舊時	舊事時
01b, 04	襍譜	襍譜	襍譜	雑譜
01b, 09	濞宮	濞宮	濞宮	漢宮

異同の箇所は、『詞源』各種刻本との関係でも、『楽府指迷』名のテキストも含め、一致の度合いが高いものがあるわけではない。巻上や「雑論」を除けば、四種の鈔本間の異同の箇所は引用の詞に多いと言える。手鈔した原本の違いを単純に反映しただけではなく、詞集などによる校訂が施されたのかもしれない。『全宋詞』と対照したとき一致がまさるのは宛委本である。

以上、鈔本間の異同を述べた。いずれのテキストも所蔵をたどると、江蘇省・浙江省の各地に流伝したものである。『詞源』が著され詞が盛んに作られたのが該地であれば当然ではある。今日に伝わらないものの『詞源』はもっと写され読まれたのであろう。四種の『詞源』であったが、それぞれにテキストの校訂などが進められていたらしい様子を窺うことができた。こうした人々の存在があって出版へと進んでいったことを確かめられたと思う。

各本の調査に当たっては、貴重書の閲覧をご許可くださった各所蔵機関、また紹介の労をとってくださった諸先生に厚く御礼申しあげます。

注

(1) 松尾肇子『詞論の成立と発展—張炎を中心として』(東方書店、二〇〇八年)「第七章『詞源』の諸本について」

(2) 詞源研究会編『宋代の詞論—張炎『詞源』』中国書店、二〇〇四年

(3) 任継愈『中国蔵書楼』(遼寧人民出版社、二〇一〇年)による。

(4) 林申清『明清著名蔵書家・蔵書印』(北京図書館出版社、二〇〇〇年)による。

(5) 陸心源は三つの蔵書楼を持ち、宋本を「皕宋楼」に、明清の善本および精鈔本を「十萬卷楼」に、普通の書籍を「守先閣」に収蔵した。前掲『明清著名蔵書家・蔵書印』による。

(6) 『孱經室外集』の部分は以下のとおり。

詞源二巻。宋張炎撰。炎有山中白雲詞。四庫全書已著録。是編依元人舊鈔影寫。上巻詳論五音十二律律呂相生以及宮調管色、諸事釐析精允、間系以圖、與姜白石歌詞九歌琴曲所記用事紀聲之法大略相同。下巻歴論制曲句法字面虚字清空意趣用事詠物節序賦情離情令曲雜論五要十四篇、並足以考見宋代樂府之制。自明陳仲醇改竄炎書刊入續祕笈中、遂失其真。微此無以辨其非。蓋前明著録之家、自陶九成説郛廣録僞書、自後多踵其弊也。

詞源二巻。宋張炎撰。炎に山中白雲詞有り。四庫は已に著録す。是の編は元人の舊鈔に依りて影寫す。上巻は五音十二律・律呂相生を詳論して以て宮調管色に及び、諸事釐析精允、間に系するに圖を以てし、姜白石の歌詞九歌琴曲に記す所の用事紀聲の法と大略相ひ同じ。下巻は制曲・句法・字面・虚字・清空・意趣・用事・詠物・節

序・賦情・離情・令曲・雑論・五要の十四篇を歴論し、並びに以て宋代樂府の制を考見するに足る。明の陳仲醇は炎の書を改竄し續祕笈中に刊入せしより、遂に其の真を失う。微しくも此に以て其の非を辨ずること無し。蓋し前明著録の家は、陶九成の説郛廣録の書を僞りしより、自後多くその弊に踵するなり。

ここに言う陳継儒による改竄とは、『宝顔堂祕笈続函』に南宋・沈義父の詞論書『楽府指迷』の名を冠して、『詞源』巻下を巻上とし、元・陸輔之『詞旨』を巻下として収録したことを指す。詳しくは前掲拙著『詞論の成立と発展―張炎を中心として』「第七章『詞源』の諸本について」「第一節　『樂府指迷』名諸本」参照。

(7) 彼には「黄氏仲子」の号があり（鄭偉章『文献家通考』中華書局、一九九九年）、「武陵仲子」の蔵書印もあるいは彼のものであるかもしれない。

(8) 静嘉堂文庫編『静嘉堂文庫宋元版図録』（汲古書院、一九九二年）「解題」に見える。

(9) 鄭孟津・呉平山『詞源解箋』（浙江古籍出版社、一九九〇年）「附録七／呉新雷先生關於南京圖書館蔵詞源版本來函（節録）」には「阮元揅經堂外集的四庫未収古書提要、詞源二巻提要」とする。

(10) 調査時に善本閲覧室におられた沈燮元先生からご教示を得た。

(11) 江南図書館への移譲については、石祥『杭州丁氏八千巻楼書事新考』「上編　八千巻楼蔵書史考、第三章　八千巻楼蔵書流散考」（上海古籍出版社、二〇一一年）に詳しい。

(12) 但し、この文字は見づらく、あるいは「傳」であるかもしれない。

(13) 巻上に用いられる記号の類に関しては本稿では取り上げることはできなかった。ひとつにはその意味を筆者が十分には理解できないからであり、もう一つには印刷の都合のためである。

(14) 「玄」は清朝では諱として忌避され、欠筆するか「元」に替えて表記された。なお、「清空」条に見える「眩」字では、宛本・南図本ともに最後の点を欠筆している。

(15) この語は姜白石「斉天楽」の過片の引用である。この詞は「詠物」に再度引かれるが、そこでは「西窓」となっている。